

# 28面から続く

## ユニバーサル社会 兵庫県知事 井戸敏三さん(69)

あっという間にインタビューの時間が過ぎていく。兵庫県知事の井戸敏三さんと、飛び入りの社会福祉法人「プロップ・ステーション」理事長のナミねえこと、竹中ナミさん。実は井戸さんのふるさとは、兵庫県揖保郡新宮町（現、たつの市）。阪神淡路大震災の翌年（1996年）に、当時の貝原俊民知事に乞われて、自治大臣官房審議官の職から兵庫県の副知事に転身した。ナミねえも神戸市の生まれ。自宅は、あの震災で全焼している。

### 見守り、地域支援が必需品に

「おまえ、ふるさとの復旧復興を手伝え」。そう貝原さんに言われた時から、「復旧復興」が、最大のミッション（使命）になった。貝原さんは同じ東大法学部卒、そして自治省の先輩でもあった。

被災地へ。街の道路は、波打ったまま。歩道もガタガタだった。

「復旧復興といっても当初は、ソフト中心の施策でいくしかなかった。その1つが『見守り』であり、今のユニバーサル社会の創造にも通じている」

「仮設住宅の暮らしで、自立は難しいけど、ちょっとした手助けがあれば暮らしていける…そんな被災者をサポートする見守りの仕組み（サービス）をどう創っていくのか。サービスを提供できる、福祉型仮設を用意した」

井戸さんは、当時を振り返りながら話した。

ボランティアやNPOの人々に、被災者の身の回りの世話やリハビリを担当してもらった。そして、「見守りの仕組み」と「地域が支援する」というシステムは、被災地の必需品になっていった。

もう1つ、ユニバーサル社会の創造に通じる施策として、その後の復興過程に入ってからの高齢者の見守りをあげた。

「仮設から恒久住宅に移行したあとも、その地域に高齢者の見守りの仕組みを創ることはとても重要だった。支援には、永続的な組織が必要だ。ボランティアやNPOの人々に活躍していただき、それを市民や行政が支援するシステムを創っていった」

### 震災10年、指針ができた

震災から10年が過ぎた2005（平成17）年4月、兵庫県は「ひょうごユニバーサル社会づくり総合指針」をつくった。井戸さんは、巻頭に次のように書いた。

「共に生きる。震災が教えてくれたこのことを基に、どこよりも安全・安心な地域づくりを進めていかなければなりません…障害の有無や年齢等にかかわらず、だれもが、同じ地域社会で生活する者として、主体的に生き、社会の支え手となることのできるユニバーサル社会の構築をめざしています」

この時の「だれもが」の例示として、「県民、地域団体、NPO、企業、自治体」などをあげている。

それから10年。「今は相当、ソフト事業に力を入れている」と井戸さん。その1つとして「みんなの声かけ運動」をあげた。障害のある人や高齢者をはじめ、だれもが道に迷っている時や電車の乗降などで困っている時に、気軽に声をかけて必要な手助けを行う県民運動だ。「県民運動として取り組もうと…。約4500人の県民（ボランティア）に『声かけ運動推進員』になっていただいている」。

さらに今、取り組んでいるのが、特別養護老人ホームを拠点にした24時間見守りサービスだ。

「特養を中心に、中学校区ぐらいかな、24時間見守りサービスを行っている。特養には人材、スタッフがそろっている。もちろん、日常の仕事があるので1人か2人、県からコーディネーターを配置して在宅の人からの連絡対応やスタッフ派遣の段取りをしている。将来的には、特養が在宅24時間サービス事業の基地になっていけばいい、と思っている」

### 「鉄棒ができる夢」筋電義手

「これ、絶対聞いてね」。インタビューの前にそういわれてナミねえから渡されていたチラシ。見出しに、こうあった。

＜小児筋電義手バンクを設立～子どもたちの夢・希望 実現のために～＞

筋電義手とは、手を失った人が、残された腕の筋肉の収縮から生じる微弱な電

気信号（生体信号）を利用して、本人の意思で指などが動かせる義手だ。兵庫県立リハビリテーション中央病院ロボットリハビリテーションセンター（神戸市西区）で開発が進められてきた。

小児筋電義手バンクは、2014年6月に誕生した。井戸さんは、集まった善意と同額を県が助成する『マッチングファンド』を採用。民間の善意3000万円と同額の3000万円を県が助成して合計6000万円の基金ができた。そして、今春から本格的に貸与事業が始まった。

「世間のみなさんの善意からバンクができて、県が何もしないというのは…。かといって、県単独でやってしまうと善意が生かせなくなる。そこで、マッチングファンドを採用した」

井戸知事は、「民」と「官（県）」の役割について、こう話した。そして、こちらのすわっている席をみやりながら、話した。

「（今年3月に）奈良県の女の子（5歳）がちょうどその席にすわって、初めて装着した。女の子は（筋電義手を使って）ちゃんと手のひらを開いたりむすんだりできていた…」

女の子は、「鉄棒ができるように（訓練を）頑張る」と話したという。

### 得意技を集めて土俵を創る

さて、戦後最悪の状態になっている生活困窮者。全国で220万人を超える、といわれている。

「格差の広がりもあるが、がんばってものお追いつけない人々が増えていると感じている。この人たちに意欲を持って



（写真 陶器浩平） Photo by Kohei TOKI

もらわないといけない。昔は、御上の庇護には入りたくない、という『やせがまんできる人』がいたが、今は違う。そんな生活弱者に対応する仕組みの発想や土俵を上手に創っていかねばと思っている」

「高齢社会で労働人口は減る一方。そんな中、社会の持続可能性を高めていく大きな要素は、女性、高齢者、障害者、そして社会に埋もれている若者だと思う。これまで『自立』の対象とされなかった人をどう支え、活躍できるようにするか。もちろん、自立できない方々については、福祉サービスを充実していかなければならない」

土俵は、どう創るのか。

「引きこもりの若者のところに県のお役人がいっても拒否されるだけ。接点を持っているグループに担ってもらおう。ボランティアであったりNPOであったり、ナミねえのような活動家であったり（笑）…。これからは、行政が単独でやるのではなくて、行政は、みんなの『得意技』を少しずつ集めてくる。結構、制度自身は、用意されている。そんな人や制度をどう結び付けていくのが重要だ」

ナミねえも、加わった。

「行政は後押しする役目。後押しされた人たちが燃え上がっていく…そんな構図ですよ」（平田篤州）

### ナミねえ 走る

## 日本を「リハビリ最先端国」として世界に発信

### 2019年、神戸で国際大会開催決定

皆さんは「補装具」をご存知ですか？生まれつきあるいは事故や病気や加齢によって失われた身体の一部、あるいは機能を補完するものを「補装具」と呼びます。具体的には、義肢（義手・義足）・車いすが有名やけど、杖・義眼・補聴器もこれにあたります。

「補装具」の研究開発は、パラリンピアンが使うことでも知られているように、材質や形状だけでなく、コンピュータを組み込んだものなど科学的な研究も進み、近年飛躍的に進化しています。兵庫県立リハビリテーション中央病

院ロボットリハビリテーションセンターの陳 隆明博士のもとで研究開発が進んでいる「小児筋電義手」は、上肢の一部を失った生後すぐからの子ども達の成長に合わせて、サイズを変更しながら製作され、子どもの日常生活を改善し、成人後の就労までを見据えたリハビリが行われています。

陳博士は、ドイツ製が中心だった筋電義手を国産化することで価格を3分の1に抑さえ、なおかつ日本人の感性に合った精緻なデザインでの製作・普及に精力的に取り組んでおられます。

また兵庫県知事、井戸敏三さんの呼びかけによって「小児筋電義手バンク」が設立され、使用者家族の負担の軽減にも取り組んでいます。小児だけでなく高齢者向けの様々な歩行補助装置などは、高齢化がますます進む日本の産業としても大きな分野に成長しつつあります。このような社会状況の中、「補装具の国際会議（ISPO）日本招致」がこの度決定しました。ISPOの日本代表をつとめる陳博士が中心となり、安倍総理、麻生副総理はじめ関係閣僚の「ウエルカム・レター」を携えての招致

活動の結果、2019年に兵庫県神戸市において国際会議の開催が実現することとなったものです。

東京オリンピック・パラリンピックの前年に開催されるこの国際会議では、リハビリロボットの見本市やパラリンピックのイベントなどもオールジャパンで企画されており、日本を「リハビリ最先端国」として世界に発信する好機になると思われます。誰もが使用する可能性のある「補装具」の分野に、国民的関心が寄せられることを心から期待するナミねえです。